The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外報告(1)　中国の「現代化」とデザイン ： 関越道中所見
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1987, 26, p. 103-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（海外報告）

中国の「現代化」とデザイン—閩越道中所見—

向　井　正　也

今年５月はじめ，ちょっとユニークな訪中団に加わって，はじめて福建省を訪れ，その三都，廈門（あもい），泉州，福州を視察することが出来た。その全行程は，起点が広州で終点が上海，往きは大阪から空路を香港経由，帰りは上海から「鑑真」で神戸への48時間の船旅であった。

この訪中の企画と推進の中心は神戸大学OBで元天津大学建築学部講師の石東直子女史で，団員の構成は，団長が京都大学の西山卯三名誉教授，副が同じく三村浩史教授の他は少数の例外を除いて，ほとんどが神戸大学関係の建築専攻の人たちであった。

この旅行団の名称は，最初は「西山先生との中国の旅」だったが，のちに「中国南海沿岸の民居・城市の散策」と，ちょっぴり中国風のよび名に更められた。旅の終りに上海での同済大学への公式訪問が日程に組みこまれていた他は，全くこの名称のとおりの気楽な物見遊山の，それに場所柄，しばしば強烈なグルメの楽しみをも加えた，10人そこそこの小人数による結構な道中だったが，一面ではもとより，人それぞれのプロフェッショナルな意図をもふくむ研修の旅でもあった。

この意味では，私にとって今度の旅の目的は，基本的には近年になって，鄧小平の指導の下に，ブルジョア的自由化路線を歩んで来た中国が，建築を中核とする生活文化一般の上でどのような変化を示して来ているかをこの目で検証し，かつ資料を蒐集することであった。

私の訪中は今度が３度目で，最初は1966年秋，「訪中兵庫学術代表団」の一員として約１ヶ月間，ほとんど中原の地に限って，各地を視察したものだが，

時あたかも文化大革命のまっただ中で，日米を敵とし，さらにはソ連とも袂を分かった臨戦体制にも近い非常時態の下で，建築をはじめとする中国の生活文化は全般としてきわめてシビアな状況下に置かれていた。その後20年の現在の中国から見ればまさに隔世の感がある。当時は時々街角で，女子をも含む「民兵」の一団が，隊伍を組み銃をかついで行進しているのにぶつかり，あたら花のつぼみをと，工人服に身を固めた少女たちを憐れに思ったものだが，いまや中国は，日本でまでファッション・ショウを行うといった程の変りようである。

こうした中国の文化の近代化・自由化は建築・デザインの面でも，もとより現象的にも急激な変化を生み，それが数々の問題点をふくむものである事は，もとより行く前からある程度はわかっていたが，実地でそれに目の当り接することで，はっきりした形での関心事とはなった。「果してこんなやり方でいいものだろうか」というのがその結論的な私の感想である。

文化大革命当時の中国の建築創造に関する党の方針としてよく引き合いに出されたスローガンに「功用，経済，在可能条件下注意美観」があったが，80年代以降，21世紀までに「4つの現代化」の達成をめざす経済政策の大転換によって，いまや上記スローガンの中でのペンディングの部分は全面的に解除されたわけであって，そこから私が，上述のように，いまなおこだわりつゞけている中国のデザインの質の問題が結果的に生じてくると思われる。

ここで早急な判断は禁物で，かつそれを論ずる場でもないので，他の機会をまちたいが，ともかく，そうした意味で私がかねて期待していた研修の目標の一つが，まず旅の出発点であえなく崩れ去ったのは何とも残念だった。前記経済政策の一環で1980年に決定された「経済特別区」の中で，最初で最大の規模を誇る深圳（しんせん）の視察が，すさまじいスコールのおかげで水に流れてしまったのである。

それでも，われわれは今一つの経済特別区である廈門（あもい），さらに，同じ開放政策によって1984年に「経済技術開発区」になったばかりの広州と上海を，それ

ぞれ旅のはじめと終りに十分視察することが出来たのであったが，こうした特別の開放地域では，目下建設中の廈門の新しい街区に典型的に見られるように，やがて外国資本との合弁企業の建設で，アメリカや日本など異国の建築家の設計によるモダニズムの建築が，さまざまな意匠を凝らし，それらに交って中国系が，あとを追うかたちで，雑多なスタイルのビルが雨後の筍のように乱立するものと思われる。

そうした様式のカクテルによるカオスもさる事ながら，一体中国の人たちはイデオロギーと建築様式の問題点をどう考えているのかと不思議に思った。

新しい体制に見合った建築様式がそうたやすく生れ得ないことはわかるが，いかに「自由化」とはいえどうしてこうも無批判かつ無制約にブルジョアジーの様式を自在にうけ入れたり模倣したりすることが出来るのであろうか。

どうやら中国人は，民族性として，元来そうしたことには全く無頓着なようで，21世紀までに達成しようと意気ごむ「４つの現代化」なる社会経済の大変革の前には，とるに足らぬ些細な問題だと考えているらしく，そうした事実は，最後に同済大学の建築都市計画学院を訪問することによって，一そう明白に裏づけられることになった。

中国の建築設計の教育が，技術的にはもとより，デザイン面でも，もっぱら日本やアメリカなど「先進国」のあとを追うようになったのは，やはり「４つの現代化」が動き出す80年代以降のことと見られるが，他は知らず，少くともそのデザイン教育の実態を見る限り，前記の基本線の問題とともに，性急なあまり，どうやら行き過ぎが目立つように思われる。

1981年当時建築学会々長だった芦原義信は，北京の清華大学で講演した際，全国各地から来た教授たちの中から「ポストモダンをどう思うか」と質問されて仰天したとのべているが，（建築雑誌'85-11月）そうした行き過ぎの傾向は，その後ますますエスカレートしつゝあることが今度の訪問で痛感せられた。

早い話同済大学でいただいた同学出版の建築雑誌「時代建築」（'87-１月）

や，たまたま上海で見つけた建築叢書の中，インテリア関係の「室内環境興(および)気雰的創造」などを見ても，モダニズムの線をとびこえて，ポストモダンに迫り，一気に後(おく)れを取りもどそうとするかのような性急さや背のびの実態がありありとうかがわれる。

ところで今度の旅の目的の中で，今一方の「民居」の散策は，「城市」のそれのようには行かず，ほとんどクルマによる通過程度に止まったが，これは上記の性急な近代化とはきわめて対照的な共存する中国のプリミティブな文化的側面を垣間見られた点できわめて有効であった。

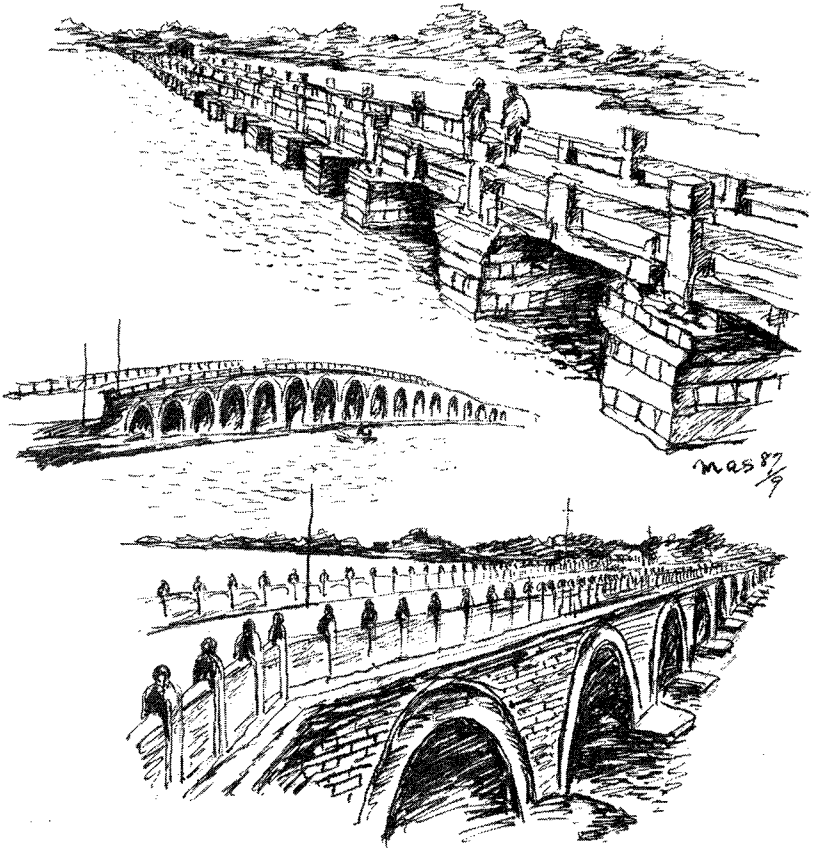
福建省は古来から「閩越(ひんえつ)」と呼ばれた辺境地帯で，遠く紀元前，秦始皇帝はここに「閩中郡」を置いたといわれるが，この地の原住民，「越人」とは浙江省を北限として，南は広東省からベトナムに及ぶ広大な分布範囲をもつ非漢族の異民族で，文明圏の「中原」からすれば，あたかも古代ローマ人にとってのフランク人やゴート人に当る蕃族(バーバリアン)に他ならなかった。そして今度，民居地帯でわれわれはそうした事が現代中国にもなおあてはまると思われるような情景に接して驚いたのである。一たび城市の外に出るや，そこにはもうタイムスリップさながらの，プリミティブな野性味の色濃く残る「閩越」地帯であった。

そこで私たちの目をとらえたものは，細く短冊形に切られた石材を，垂直材（柱）と水平材（梁）との組合せによる楣(まぐさ)式構造によって今なお石造民居を新築しつつある原住民の姿であった。

彼らはこの楣式によって〈野越え山越え〉の水道橋，さらには大河に架かる石橋までも造っていたのである。

泉州市外の落陽橋や，福州市の萬寿橋など，そのいかなる橋梁美学とも無縁の，粗雑でぶざまな姿によって，中国の一つの土着部族の外貌を今に伝えるものであろう。それは古来中国が世界に誇って来た美しい中原の石造棋(アーチ)橋と，あまりにもきわ立った対照を示すもので，ここにおける対照とは文化的な対照

に他ならない。こうした例に徴して考えても，一般に現代化の将来における中国のデザインもまた，その伝統としての文化的な両極併存の相を，今後もなお依然として長くもちつづけるのではないかと思う。



ぶざまな「閩」の楣式石橋
(上)安平橋(12世紀，泉州)
「是中国古代花崗岩梁式長橋」と案内にある。施工技術がきわめて拙劣でもある。

美しい「中原」のアーチ橋
(中)十七孔橋(北京・頤和園)
(下)蘆溝橋(13世紀，北京近郊)
13のアーチからなる壮大な橋，アルコポーロがその美を賞したので有名。